

ご あ い さ つ

天目という名称は浙江省北部の天目山に由来するもので、日本では14世紀ごろから使われてきました。現在では中国でも、欧米でも天目(*tenmoku*)という用語が使われています。

天目という言葉の定義は曖昧で、一般的には茶の湯で用いられ、すり鉢形で小さな高台をもち、かつ黒釉が施された茶碗のことと考えられています。そして、天目は「曜変天目」、「油滴天目」、「禾目天目」、「河南天目」、「灰被天目」、「玳皮天目」などの用語として使われてきています。

また、このような喫茶の茶碗の器形を、歴史的には天目と呼ぶこともあります。そして、近年では黒釉が施された陶器全般を天目と呼ぶ場合もあり、黒釉のことを天目釉と称することもあります。

本展では黒釉の施された陶磁器もふくめて、様々な天目を大阪市立東洋陶磁美術館の所蔵品や個人蔵の作品を中心にして、紹介いたします。

黒釉の陶磁器は東晋時代(317~420)に徳清窯で盛んに焼成され、唐時代(618~907)には河南省の鞏義窯や河北省の邢州窯、陝西省の耀州窯などで焼成されました。宋時代(960~1279)には浙江省や福建省の建窯を始めとする各窯、江西省の吉州窯などのほか、河北省の磁州窯や定窯、河南省の当陽峪窯、陝西省の耀州窯、山西省の懷仁窯など各地で黒釉陶磁器が焼成されています。中でも建窯の黒釉茶碗は建盏として著名でした。宋時代は天目の全盛期であり、金時代(1115~1234)、元時代(1271~1368)においても引き続き黒釉陶磁器が各地の窯で焼成されました。

宋時代の黒釉の碗が、鎌倉時代(1185~1333)から室町時代(1336~1573)に日本へ多数輸入され、特に曜変や油滴、建盏などの唐物として、大切にされ現代にまで伝えられてきています。

今回の展覧会にあたり、貴重な作品をご出品いただいたご所蔵者の方々、ならびに関係各位から惜しみないご協力をいただいたことに心より御礼申し上げます。

大阪市立東洋陶磁美術館
館長 出川哲朗